社会主義革命と民主主義のための闘争Ⅰ

もちろん、民主主義もまた国家の一形態であって、国家が消滅するときには消滅しなければならないが、しかし、終局的に勝利を占め、強固になった社会主義から完全な共産主義へ移行するさいにはじめてそうなるであろう。

二　社会主義革命と民主主義のための闘争

社会主義革命は、ただ一回の行為でも、ただ一つの戦線におけるただ一回の戦闘でもなく、幾多の激烈な階級衝突からなる一時代であり、あらゆる戦線にわたる、すなわち、経済上および政治上のあらゆる問題にかんする戦闘の長い系列である。これらの戦闘は、ブルジョアジーの収奪によってはじめて完了することができる。民主主義のための闘争は、プロレタリアートを社会主義革命からそらせるか、あるいは、それをさえぎり、あいまいにする恐れがあるなどと考えるのは、根本的な誤りであろう。反対に、勝利をえた社会主義が完全な民主主義を実現しないということがありえないのと同様に、民主主義のための全面的な、一貫した革命的闘争を行わないようなプロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする勝利の準備を整えることはできない。

民主主義的綱領の諸条項の一つ、たとえば民族自決の条項は、帝国主義のもとでは「実現不可能」であるとか「幻想」であるとかいう理由で、この条項を削除することも、これにおとらぬ誤りであろう。資本主義の限界内では民族自決権は実現不可能であるという主張は、絶対的、経済的な意味にもとれるし、条件的、政治的な意味にもとることができる。

前者のばあいには、これは、理論上、根本的に誤りである。第一に、資本主義のもとでこのような意味で実現不可能なのは、たとえば、労働貨幣、もしくは恐慌の絶滅などである。民族自決**もまた**これらと**同じように**実現不可能であるというのは、まったくまちがいである。第二に、1905 年にスウェーデンからノールウェーが分離したという一例だけでも、こういう意味での「実現不可能性」を反駁するのに十分である。第三に、たとえば、ドイツとイギリスの政治上ならびに戦略上の相互関係がすこし変化すれば、きょうあすにもポーランド、インド、その他の新国家の形成が完全に「実現可能」であることを否定するのは、こっけいであろう。第四に、金融資本は、その膨脹欲から、任意の国で、たとえ独立国であろうとも、もっとも自由な民主主義的・共和主義的な政府や選出された官吏を「自由」に買収し籠絡するであろう。金融資本の支配は、資本一般の支配と同じように、政治的民主主義の分野における**どういう**改革によっても排除できない。ところで、自決は、まったく、もっぱらこの分野にかんするものである。しかし、金融資本のこういう支配があるからといって、階級抑圧と階級闘争とのより自由な、広範な、そして明瞭な形態としての政治的民主主義の意義は、すこしもなくならない。だから、資本主義のもとでは政治的民主主義の諸要求の一つが経済的な意味で「実現不可能」だという議論はすべて、結局は、一般に資本主義と政治的民主主義との一般的および基本的諸関係を理論上まちがって規定することになるのである。

第二のばあいには、この主張は不完全であり、不正確である。なぜなら、民族自決権にかぎらず、政治的民主主義の**あらゆる**根本的要求が、帝国主義のもとで「実現可能」であるのは、不完全な、かたわにされた形でにすぎず、またまれな例外（たとえば 1905 年に

おけるスウェーデンからのノールウェーの分離）としてにすぎない。あらゆる革命的な社会民主主義者が提出している植民地の即時解放の要求もまた、資本主義のもとでは、一連の革命なしにはやはり「実現不可能」である。しかし、だからといって、社会民主党が、これら**すべて**の要求をめざす、即時の、もっとも断固たる闘争を放棄することには、けっしてならない――これを放棄すれば､ブルジョアジーと反動派を利するだけであろう――。まさにその反対に、すべてこれらの要求を改良主義的でなしに革命的に定式化し実行することが必要となるのである。すなわち、ブルジョア的合法性の枠に制限されずに、それを打破し、議会演説や口さきだけの抗議に満足しないで、大衆を積極的な行動に引きいれ、あらゆる根本的な民主主義的要求のための闘争を拡大し燃えたたせて、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの直接の突撃に、すなわちブルジョアジーを収奪する社会主義革命に導かなければならない。社会主義革命は、大ストライキや、街頭のデモンストレーションや、飢餓一揆や、軍事的蜂起や、植民地の反乱からでなければ燃えあがりえないものではない。それは、また、ドレフュス事件や、ツァーベルン事件のような、どんな政治的危機からでも､あるいは被抑圧民族の分離問題にかんする人民投票などと結びついても、燃えあがりうるのである。

帝国主義のもとての民族抑圧の強化は、社会民主党が民族の分離の自由のための――ブルジョアジーに言わせると――「空想的」な闘争を放棄する条件となるものではなく、反対に、この基盤のうえ**でも**発生する諸衝突を、大衆行動の、またブルジョアジーにたいする革命的行動のきっかけとしていっそう強力に利用する条件となるのである。

注）「ドレフュス事件、ツァーベルン事件」小さな事件から世論が憤激を爆発させた例
――青山　　第 22 巻 P166~168『社会主義革命と民族自決権』
1916 年 1 ～ 2 月に執筆

ポイント

民主主義のための闘争は､プロレタリアートを社会主義革命からそらせるか､あるいは､それをさえぎり、あいまいにする恐れがあるなどと考えるのは、根本的な誤りである。反対に、勝利をえた社会主義が完全な民主主義を実現しないということがありえないのと同様に、民主主義のための全面的な、一貫した革命的闘争を行わないようなプロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする勝利の準備を整えることができない。

しかし、政治的民主主義のあらゆる根本的要求が、帝国主義のもとで「実現可能」であるのは、不完全な、かたわにされた形でにすぎず、またまれな例外としてにすぎない。革命的な社会民主主義者が提出しているあらゆる要求は、資本主義のもとでは、一連の革命なしにはやはり「実現不可能」である。

だから、社会民主党は、すべてこれらの要求を改良主義的でなしに革命的に定式化して提起することが必要である。

なお、レーニンは情勢の捉え方として、最後の段落で述べているように､「反動」について､「闘争を放棄する」のではなく､「大衆行動」を起こす「動」のための「強力に利用する条件」とみて、常に、革命的に問題を提起している。